アニエス・ラリサにて（1974）

崎本智（6）

「土星の衛星であるディオネという星をご存じかしら、アニエス……」
「いいえ、知らないわ……マダム」
リセからすぐ近くのアパルトマンの一室。
北欧・中東・アジア諸国のさまざまな国のおみやげで彩られた部屋。
主が旅行好きであることは一目瞭然だ。
その部屋でわたしはマダムから数学や英語や地学を教わっていた。
マダムのフランス語はときどき変に裏返ったりしてフランス語を離れた独特のニュアンスでわたしの耳をおどろかした。
母はわたしが家庭教師をつけてほしい、とねだるとマダムのところへ行きなさいと諭した。
彼女のフランス語は流麗ではなかったけど詩的な豊かさにみちていた。
そう、喩えるならカーンの街をながれるオルヌ川のように。
マダムはバカロレアをとるための十分な勉強方法と知識を身につけていたのでわたしにとって不満はなかった。
ふいをつくようにマダムは宇宙の話をした。
「小さな星。ひとびとは忘れているの。この星のことを。でも……わたしの知人にはこの星が好きでよく観測しているひともいる。そのひとから聞いた話だけどディオネという星の表面には傷があるのよ。」
「きず？」
「ええ、アニエス。あなたもこれから沢山の傷を持つことになる。生きていくのだから……。ディオネが背負った傷の名前は《ラリサ・チャスマ》というの。ギリシャのラリサという街の名前からとったの。覚えておきなさい」

一九七一年の八月。わたしが十八歳になる日。誕生日を祝ってもらおうとマダムのところへいくとアパルトマンが立ち入り禁止になっていた。男たちが険しい表情で輪になって何かを話している。無線でどこかへ連絡をとっている。ものものしい緊張が漂っていた。
烏が街灯にとまっている。わたしは烏の視線の先にマダムが手錠をかけられて何人かの男たちに連れて行かれるのを見た。
そのときの光景はわたしの人生のはじめての傷として深く覚えている。
マダムは二年前、広場で起きた大規模な事件にかかわる政治犯の嫌疑をかけられ、警察に連れて行かれた。

一九七四年八月。わたしは二一歳になった。

マダムにはあの日以来会っていない。結局わたしは大学にいかず、空港のレストランで働いている。たまにダンスを習いにいくことぐらいしかたのしみはない。
生きていて何の意味があるのだろう。その意味をマダムに問いかけてみたかった。
問いはいくつもの流れ星をつくり屑星となっていった。マダムがいたらそれを星座にしてくれただろう。
盾。
後ろ盾という言葉がある。マダムはリセに通っていたころのわたしにとっての大きな盾だった。
マダムの消息はつかめないまま、わたしはいくつもの国境を越えながら列車で旅をしていた。レストランで貯めたお金をもって、フランスの田舎町からお上りしてきた。外国の文化や文字はわたしの身体にそそぎこまれ、少しずつわたしは意味をとりもどすようだった。
櫂。
街のなかを河川がながれている国があった。一艘の小舟を借りてわたしも河川にこぎだしてみた。けれどわたしはいつのまにか櫂を離してしまい、櫂は水底に沈んでいった。わたしはそれをわたしの肢体が沈んでいくようにみつめていたのだ。
また国境を超える。
国境を超える度に新しい血がながれるような瞬間にあう。
それは朝も昼も夜も同じことだ。
真夜中に眼が覚めて、血のながれを感じる時それは国境を越えたという証なのだ。
いまはアテネ経由でテッサロニキ行きの列車に揺られている。外国の街並みは見ているだけでわたしのなかにある様々な意味の色を塗り替えるような経験をもたらした。
ある駅に着く。
そこはわたしにとっての宿命的な場所である。
ラリサ。《ラリサ・チャスマ》……かつてマダムが教えてくれた街の名前だ。
灰白色の広い空。
雲の隙間から容赦なく落ちてくる陽ざし。
いくつもの小路が蜘蛛の巣のようにめぐる街。
地図には小路のひとつひとつにギリシャ文字で名前がつけられている。
わたしにとってはじめて見る空の色のような気がした。
きっとわたしの国と変らない色なのに。
riverun - 川走 -
『フィネガンズ・ウェイク』のはじまりの一節があたまの隅に飛来する。
どうして、何年もまえに読んだ小説の単語を思いだしたのか分からない。
ラリサの空が見せる奇蹟だろうか。いえ、こんな小さなことを奇蹟と呼んでしまったら、世界中の偶然は奇蹟に転じられてしまう……。
異郷の地ではじまりは唐突におとずれる。

風。
わたしの帽子はラリサの街並みのなかへ飛んでいった。
風船のように高く舞い上がって空を遊覧しているようだ。わたしは帽子をおいかけてラリサの街を駈けていった。
真夏の太陽に覆われた街は何もかもが陽の光を吸い込んで膨張しているような存在感だ。
屋根瓦は熱く熱をもっている。
小路がはりめぐらされた街はアパルトマンが乱雑にならんでいる。そしてたくさんの車。
この街はひとびとが眠る街として機能しているのかもしれない。
パン売りのおじさんから円盤状のパンをひとつ買い、手でちぎりながら食べる。
やわらかい、そして乳のにおいがする。真夏の真昼。ひとびとは肌をむきだしにしてアスファルトのうえに寝転んで日光浴をたのしむ。
バカンス。
使い古された言葉もまだこの街ではおさまることができるようだ。
ひとりのグレーのスーツを着込んだ男が前を歩いている。男はメモを右手にもち、どこかを訪ね歩いているように見えた。顔は見えない。
なんだか怖くなり、帽子を探すことも忘れてわたしは手近な店に入った。
石鹸を売る店だった。
「この店は石鹸しか売っていないの？」
禿げあがったひとのよさそうな店主は誇りをもっていう。
「シリアで有名なおみやげだよ。大理石で冷やし、固められた石鹸さ。旅人さんいまに、この国の流行になるよ」
店主はサンプルの石鹸を指の腹でこすり、わたしの鼻にかざす。
あまいなつかしいにおいに石の冷たさが感じられた。
丁重に礼のようなおぼつかない言葉をのべて、ふたたび帽子をさがす。
でもみつからない。
翼でもあればよいのに。
街を歩き疲れたわたしはホテルのカフェでレモンサワーを注文した。
半月型にきりおとされたレモンが氷のうえにうかんでいる。
カフェは埃っぽい造花があちこちに配された寂しい内観だった。
場違いなクロード・モネの『睡蓮』の絵が壁のなかに埋もれている。
東洋のお香の匂いがする。音楽が小さく聴こえている。なんの音楽だろう。クラシックだろうか。艶のある旋律。蓄音機からながれているのかと辺りを見渡すと他に客がいることにいままできづいていなかった。
グレーのスーツを着た男だ。暗い紺色のタイをしめて窓枠に坐っている。
「あなた帽子をなくした女のひとでしょうか」
一瞥もせずにスーツの男は問う。

彫刻のように静かな雰囲気をもった男だ。
また風。
海の色に彩られた、潮に揉まれた風がはこばれてくる。
それにつられて古典的な音楽のメロディはきえてしまっていた。
「帽子のありかは私にも分かりません」
「それはそうでしょうね、あなたはいったい誰なの」
「名前は一応」
「おしえて」
「タナシス……呼びにくければ呼ばれなくても結構です」
ホテルの傍にとまっていたプジョー１０４に二人は乗り込む。
わたしは誘拐されたのだろうか。空は灰白色のまま何時間も経ち、それでも陽ざしはどこからか降りそそぐ。市街地ではたびたび渋滞にまきこまれた。
タナシスは焦慮の感情にかられることもなく、煙草をふきだして煙にまかれている。
独裁者であるパパドプロスの肖像画が街にはまだ多く残っている。硬貨にもまだ不死鳥が刻まれたままだ。陽が落ちていくにつれて街は渋滞だらけだった。渋滞が街を覆っていた。
プジョーのよこには辻馬車が一台停まっていた。
車輪のなかに不死鳥がうかびあがる。
停車していた辻馬車がはしりだす。
車輪の軸にパパドロスの象徴たる不死鳥が描かれている。
暑さによろめきながら、こぼれるようになにかを吐きだしたかった。
不死鳥が回転するようすが太陽を連想させた。わたしは目をつむり時間の経過をまった。
市街地をぬけて、夕闇の牧草地にでる。
太陽は地平線のうしろに落ちて、雲はまっ黒になる。
雲は翳をきわだたせて鉄骨で建造された大型船のような重量感をたくわえていた。
鈍色の雲の背を天使が通ったような黄金色の空。近くまで来ている秋を予感させる。
辻馬車の車輪の記憶。陽ざしのなかに映しだされるリセの記憶。
あの革命で皆が浮足立っていた広場の記憶。さざ波。記憶は何度もおしよせる。
車輪の翳はいつまでもわたしの皮膚や血や肉体のなかで廻りつづけている。
翳。
翳はわたしを車輪のなかにひきずりこむようでもあった。呼吸がみだれる。
畑の空を赤い風船が街の喧騒からはぐれて飛んでいた。赤色の風船は闇に染まり藍色の浜辺のようでもあった。ふときづくと言葉に肩をたたかれていた。
わたしは我にかえる。プジョーは平然と田舎道をはしりつづけている。
そのまま北の国境に通じるアウトバーンを限界速度ではしりとおす。
この国はまだ病んでいる。そうおもった。
プジョー１０４は河畔林のいりぐちにとまる。

あたりはすっかり夜になっていた。
タナシスは車にキーをいれ、わたしの鞄を黙って抱え先を歩いていく。
川添いを二人で歩く。
ふいに林が明るくなり、楽器の音が聴こえ灯がいくつも林の枝枝に提げられて、あたりは昼間のように明るい。
祭り。
タナシスは何も言わず、祭りのなかをとおりすぎていく。ギリシャ語で何かを囃したてながらひとびとは現実をわすれて陽気におどりだす。まだ小さな子も大勢いた。魚を焼く匂いがしてお腹が空いてきた。タナシスは暗い眼をして革靴で林のなかを歩き続ける。
二回。
花火があがる音が聞こえた。わたしは人身売買にでもあってしまうのではないだろうかと、嫌な予感しかなかったが、こちらを振り向きもしないタナシスに悪意があるようにも感じられなくて歩き続けるしかなかった。川がため池のような場所にながれこみ、祭りの音楽もひとも絶えはじめるところで草のうえにタナシスは腰をおろす。タナシスは胸ポケットからハンカチをだして草のうえに敷き、わたしに坐るようにうながす。どこに携帯していたのか、ミネラルウォーターと梨をだして果物ナイフで半分に切り落とし、それを手渡す。
梨は冷たくはなかったが良い味がした。
わたしたちの背後からは花火の音が続いている。
タナシスは一瞥もしない。光が群青色に染まった水面に綿毛をちらしたようにはじける。
あお、あか、みどり、だいだい、むらさき、もも。
よどみない光の祭典。水に映る曖昧な像。
白煙になる姿までは見えない。光の点滅のみがあるだけ。あとは無の暗闇になる。
余韻など残さない。水面の光たちにてらされたタナシスの顔は蒼白くときおり輝いていた。
タナシスは何を見ているのだろう。何も見ていないような気がしてならない。言葉はわたしたちをおいかけてこなかった。わたしたちは池の畔で何者にも見放された神話の子供のように仰向けに仆れ、草花の匂いをかぐ。
涙がながれた。四足獣の遠吠えが林のなかから聴こえ、タナシスはたちあがりまた先を歩いていった。花火の音はやみ、あたりはすっかり静寂にのまれていた。
藍色の浜辺に横たわるようだった。わたしにはそれしか言えない。皮膚は呼吸することをわすれて、汗をかかなくなり行き場のない水分は尿意となっておとずれた。
いつのころからか、駈けっこで男の子たちに勝てなくなるときがあり、わたしの乳房は魔法のようにふくらみ、いつかここから乳がでるとわかっていたのに想像できなかった未来がまんざら信じられなくもなかった。わたしは草のなかで考え込む。
「夜にさらわれてしまいますよ」タナシスは背中を向けてそういう。
国境を超えるような感覚が林のある楡らしき木の根を跨いだときに感じられた。
ここは？

土地の匂いがあたらしく更新されたようだった。
ラリサではない……。
いくつかの建物が闇のなかにうかびはじめた。そのうちのひとつにタナシスは入っていく。
《真夏のクリスマス》という看板がかけられていた。宿屋のようだった。
宿屋ではシナモン入りの牛乳ライスをごちそうになり、わたしは眠りについた。タナシスがわたしのベットの傍まで来てわたしのことをじっと見ている。
「ここはまだラリサなの？」
「そうです。ひとたびラリサに入ればラリサから外は永遠にラリサ」
「馬鹿な話をしないでちょうだい」
「私はふざけてはいないつもりです。あなたの宿命があなたを変えるなら、ラリサを訪れた経験はずっとあなたのなかに残り続けるはずです。山火事のように、とどまることを知らない」
「わたしをどこへつれていく気？」
「あなたの会いたい人のもとへ。あしたの朝、一番にお連れします」
とだけいい、タナシスは自分の部屋に入って扉を閉めた。

「起きてください、アニエスさん」
タナシスの声がする。
ピジャマの姿でわたしはタナシスのすがたを探す。歯も磨いていないのに、スリッパを穿いて部屋をでる。宿屋のフロントはだれもいない。
すがすがしい朝の気配。くうきが爽やかだった。
食堂に入り、冷蔵庫から牛乳をとりだしてロック・グラスにそそぎ口にいれる。
喉を牛乳がとおる音がする。
唇を手のこうでぬぐう。
ここはどこの国？
もうギリシャではないのかしら。
パスポートはラリサのホテルに置いたままなのに。
「あなたもしつこいな」
ふりかえるとタナシスが昨日と同じグレーのスーツを着てたっている。
「ここはラリサですよ」
ラリサはもっと都会よ。ここは田舎の宿場町でしょう。
「じゃあちょっとそこの勝手口からでてごらんなさい」
海のような空がきらめいている。
白いハンチング帽が飛んでいるのかと思えば鴎たちだった。
天候こそ違うけれどわたしが歩きとおした小路の風景がみえる。
パパドロスの肖像画も、不死鳥のシンボルもその街にはまだ残っていた。

信じることができない……。
アウトバーンにのって遠い林のなかにまで来たのに、まだラリサのなかにいるのだろうか。
大理石の床で冷やされて固められた石鹸を売る店があり、そこにはあの親切な禿げ頭の店主もいた。夢をみているの？
「あなたの傷ってそういうことなの」
だれ？
おぼえのある優しい声。風変わりなフランス語の発音。
「ラリサは《傷の名前》と通じ合っているの」
だれなの？
「アニエス、現実を直視しなさい。真実は現実の梢にしか宿らない。あなたはこのラリサの街で自分の傷と向かい合いなさい。歩きなさい、まっすぐ。」
遠い宇宙から声が聴こえるようだった。衛星の隙間を抜けて、彼方から届いた声だろうか。
まどろんだ意識のなかで夢であることに気づいてもそれを振りほどくことはできない。こんがらがった縄のように動けば動くほど堅くしまっていく。白昼夢のなか。夢を夢と認識できずに半覚せい状態のいま。この感情をだれに説明することもわたしにはできない。
孤独。
そして《ラリサ・チャスマ》……。
ひとびとがディオネという衛星にみつけた傷はなによりも孤独から……。
孤独からうまれたものではなかったのか……。それをわたしはマダムに問いたい。
ねえ、マダム……。

タナシスが枕元で、わたしがなくした帽子を持ってたっていた。
「え」
「わたしの部屋の窓に近い楡の小枝にひっかかっていました。あなたの帽子でしょう？
ついにはこのようなところにまで飛んで来ていたのですね」
不思議そうな顔で見ていると
「さぁいきましょう」とわたしの顔を正面からみつめてタナシスはうながす。
洋服に着替えて、タナシスとふたたび林のなかを歩く。
小川のうえにかかった小さな橋を渡るとき、タナシスは
「あぶない」
といってわたしの手をつかんで先を歩いた。
橋を渡り終えるとタナシスはすぐに手を離した。
ツツッツッツッツッツッ、と鳥の声がしたと思うとタナシスも声真似で鳥の警戒心をなくそうとする。ツツッツッツッツッツッ……。まるで二匹の鳥がいるようだ。
「ゴジュウカラ」
聞こえるか聞こえないほどのか細い声でタナシスが呟く。

歩きづらそうな革靴ですいすい林のなかをわけいっていく。
そしてイラクサの群生するひらけた場所にたどりついた。
墓石がひとに忘れられたかのようにひっそりとたっていた。
「きれいなお墓……。いったい誰の？」
タナシスはイラクサのなかに埋もれた墓碑銘を指さす。

Eva・Aimée

その名前には覚えがある。
リセの記憶、そしてわたしのマダムの名前だ……。

（了）